

教師と社会人が連携して複数校がオンラインを利用した

総合的な探究の時間のプログラム作り

菅原 幹夫（東京都立板橋高等学校 地理歴史科教諭）

深井 恒太郎（NPO 法人タテイト代表）

社会人と教員が合同して「総合的な探究の時間」のプログラムを作ることの意義について

今回、このような取り組みを行った背景には、「総合的な探究の時間の授業作り」に大変な難しさがあることと、より多くの方々の知恵を借りて授業作りをしてみようということから始まった。実際、「総合的な探究の時間」の「ねらい」を十分理解したうえで授業を作っていくが、その中で「様々な視点に基づいて授業を作る」ことで、生徒の「課題解決能力」「課題発見能力」そして「答えが無い問に対してどのように取り組むのか」のそれぞれの力を身に着けさせられるのではないかと考えた。

そこで、社会の中で実際日々「様々な課題に取り組んでいる」社会人の方と一緒に、「学習指導要領が定める探究の時間のねらい」を意識して授業作りを行った。ここでは、私と社会人のタテイトという NPO 法人の方で役割分担を明確に行い、そこに参加する生徒には教員がついて学校の管理が行き届く形で行った。その際、「教員の関わり」方については、菅原が担当し、授業のプログラム作り自体はタテイトが担当した。その中で、生徒の理解力やモチベーションなどをこの取り組みに関わる教員が掌握し、プログラムの内容についてタテイトさんに意見をしてもらった。社会人の方が「伝えたいことを伝える」のではなく、「生徒に力を身に着けさせる伴走」という気持ちでタテイトさんには参加してもらった。しかし、伴走する際には、時には先頭に立ち、生徒の理解の状況を分析してもらい生徒のメンター役も担当してもらった。

ここでの気づきとして、「優秀な社会人の方に全てをお任せして」「プログラムを作ってもらおう」のではなく、あくまで主体は生徒であり、その生徒の一番身近にいるのは教師であることから、生徒の役に立つプログラムを作るには、教員の深い関与が絶対に必要であり、これらを理解してもらった上で、「中身が濃く」「深い内容のプログラムを作る」と同時に、プログラム実施時には生徒の目線をしっかりと意識してメンターを務めてもらえる方々と一緒にプログラムに取り組む必要がある。このことから、外部の方と一緒に授業作りをすることは難しい部分も多いが、同時に「教師にはない視点」での授業作りができるという点において、大変意義深い取り組みであると考えている。